

令和 2 年 9 月 24 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03508

研究課題名(和文) 東寺領荘園(新見荘・弓削荘)の考古学的基礎研究

研究課題名(英文) Fundamental Archaeological Research on estates of To-ji Temple -Niimi-no-sho and Yuge-no-sho-

研究代表者

村上 恭通 (Murakami, Yasuyuki)

愛媛大学・アジア古代産業考古学研究センター・教授

研究者番号：40239504

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,200,000円

研究成果の概要(和文)：岡山県新見市と愛媛県上島町弓削には中世において京都・東寺の荘園がおかれ、それぞれ鉄、塩を東寺に貢納していた。しかしながら、いずれの地域においても生産遺跡は確認されておらず、物質的な証拠が全くないという状況であった。本研究は、生産地として文書に登場する新見市高瀬地区、上島町上弓削地区を対象として、踏査、試掘調査を実施した。その結果、高瀬地区では製鉄遺跡8カ所、上弓削地区では3カ所の製塩遺跡を発見した。国宝「東寺百合文書」に描かれた鉄生産、塩生産の痕跡を本研究が初めて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新見荘、弓削島荘に関する東寺領荘園研究は著しく進展しているが、新見荘の鉄生産、弓削島荘の塩生産の具象は議論する余地もない状況であった。本研究が明らかにした各生産遺跡の分布、立地、構造、時代は、大規模施設をともなう東寺領荘園の生産体制に関する研究の端緒として評価できる。また国宝『東寺百合文書』とその内容については周知されているが、地域社会にとっては過去の記憶が京都にのこされているといった程度の認識であった。2015年10月、『東寺百合文書』がユネスコの世界記憶遺産登録を機に、地域史に対する関心が高揚しつつある新見市、上島町にとって本研究の成果は、その活動のよりどころとなるに違いない。

研究成果の概要(英文)： In the Middle Ages, manors of Toji Temple in Kyoto were located in Niimi City, Okayama Prefecture and Yugesima, Kamishima Town, Ehime Prefecture, and each of them contributed iron and salt to Toji Temple. However, no production sites were identified in any of the areas and there was no material evidence at all.

In this study, we surveyed and explored the Takase area in Niimi City and the Kamiyuge area in Kamijima Town. Both of which appear in the "Toji Hyakugo Document" as production areas. As a result, eight iron production sites were discovered in the Takase area and three salt production sites in the Kamiyuge area. This study reveals for the first time the traces of iron and salt production depicted in the national treasure "Toji Hyakugo Document".

研究分野：考古学

キーワード：東寺領荘園 新見荘 弓削島荘 製鉄 製塩

1. 研究開始当初の背景

国宝『東寺百合文書』に関する研究の深化は岡山県新見市にあった新見荘の鉄生産、愛媛県上島町にあった弓削島荘における塩生産に関する研究の進展を促進した。ただしこれらの研究の限界は、生産が行われた場所あるいは生産施設といった生産の具体像にまではアプローチできない点であった。新見荘については、製鉄の中核を担い、網野善彦氏が「製鉄村」と称した吉野村〔網野 1995〕、つまり現在の新見市神郷町高瀬では中世の製鉄遺跡自体は全く周知されていなかった〔海老澤 2015〕。一方、愛媛県越智郡上島町では、山内譲氏による詳細な塩浜（塩田）に関する文献研究〔山内 1985〕の成果があり、地名の交渉から塩浜の存在が想定できるところまで達していた。2011年に愛媛大学と上島町教育委員会が共同で開始した隣島の佐島に所在する宮ノ浦（みやんな）遺跡の発掘調査により、中世の遺構・遺物が発見されるようになり、弓削島でも発掘調査により東寺荘園領時代の遺跡の発見が期待されるようになった。2015年10月、『東寺百合文書』がユネスコの世界記憶遺産登録を機に両自治体および地域住民の意識も高まり、それを追い風として新見荘の鉄生産、弓削島荘の塩生産を地域にのこされた遺跡から具体的に証明できるのではないかという機運も高まっていた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、岡山県新見市高瀬地区において製鉄遺跡を、愛媛県上島町上弓削地区において塩田遺跡（製塩遺跡）を発見し、それらが中世の生産遺跡であるという証明をすることを目的とする。

(2) 塩田遺跡については、弓削島の西に浮かぶ猿島に所在する海浜遺跡、宮ノ浦遺跡を発掘調査し、荘園時代の前史となる古代の海浜における生産様相を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 遺跡の探索については、新見市高瀬地区においては地域住民への聞き取りによる情報と踏査によった。一方、上島町上弓削地区においては、先述の山内譲氏の研究成果をもとに、地形の改変の少ない地域を選び、試掘調査を行った。

(2) 生産施設の構造については、試掘調査により平面的、立体的な記録をとりながら、観察した。

(3) 生産施設の年代については、遺構にともなう土器・陶磁器から相対的な年代を明らかにし、同時に、遺構にともなう木炭をサンプリングし、それを資料として放射性炭素年代測定

を実施した。

4. 研究成果

(1) 新見市高瀬地区においては8カ所の製鉄遺跡を発見し、そのうち5遺跡に関して年代測定を実施した結果、4遺跡が中世の遺跡であることが判明した。そのうち、貫神ソウリ遺跡と鍛冶屋床遺跡において試掘調査を実施した。

貫神ソウリ遺跡は新見市神郷高瀬 1523 - 3 番地にあり、北緯 35 度 4 分 39 秒、東経 133 度 17 分 4 秒、標高 780.0m である。高梁川の支流、高瀬川に合流する飛石川上流左岸に位置する。南北に細長い約 100 m²の平坦面はその東部斜面に大量の炉壁片と鉄滓をふくむスラグ原が形成されている。試掘調査の結果、後世に削平を受け、製鉄に関連する遺構は滅失していたことが判明した。ただし、周辺に散乱する製鉄炉の残骸や鉄滓は重要な資料であり、今後の調査が必要である。

鍛冶屋床遺跡は神郷高瀬 1505 番地にあり、北緯 35 度 4 分 36 秒、東経 133 度 18 分 9 秒、標高 680.2m である。貫神ソウリ遺跡から東に約 1.1km 離れている。試掘調査の結果、礫を組んで作った構造物が発見され、その下から溝状遺構が検出された。これは製鉄炉の地下に設けられた防湿構造の一部と判断できた。

貫神ソウリ遺跡、鍛冶屋床遺跡では土器・陶磁器などの年代を判別できる遺物が全く出土しなかった。そこで前者ではスラグ原で炉壁、鉄滓とともに検出した木炭 1 点、後者ではスラグ原で採集した鉄滓の噛み込み木炭 1 点を試料として放射性炭素年代測定した。その結果、それぞれの暦年較正年代は貫神ソウリ遺跡が 1276 ~ 1296calAD を示した。その結果、貫神ソウリ遺跡が東寺領前、つまり景勝光院領時代に属することがわかった。鍛冶屋床遺跡が 1485 ~ 1522calAD、1573 ~ 1629calAD という二つの数値を示した。一方、二つの年代幅が示された鍛冶屋床遺跡はその年代の絞り込みが単純ではないが、15 世紀後葉から 16 世紀前葉の年代が適合しているとみられ、鍛冶屋床遺跡が東寺領荘園時代に属するものと判断される。

上記した 2 遺跡のほか通称、新畑南、長久山一ノ森、床畝でも鉄滓散布地をともなう製鉄



写真 1 貫神ソウリ遺跡遠景



写真 2 鍛冶屋床遺跡地下構造検出状況



写真3 高浜八幡神社の発掘地点（○印）



写真4 高浜八幡神社で検出した浜床

遺跡を確認した。各遺跡のスラグ原で木炭噛み込み鉄滓を採集し、その木炭を試料として放射性炭素年代測定を行った。その結果、新畑南、長久山一ノ谷が15世紀後半～16世紀前半で荘園時代に属することがわかった。このほか鉄滓散布地を3カ所で確認したが、良好な状態で依存する木炭をサンプリングできなかったために年代測定は実施していない。

(2) 上島町上弓削地区においては山内譲氏の研究成果に基づき、高浜八幡神社と大田林を試掘し、いずれも中世の塩田遺跡であることが判明した。

高浜八幡神社は上島町弓削上弓削3番地1に位置し、北緯34度17分1秒、東経133度12分45秒である。試掘調査は高浜八幡神社境内の中心部からやや南によった縁辺部で行った。汀線から約40m離れている。試掘の結果、地表から約80cmの深さで堅緻に造成された浜床層(20層、21層)を検出した。本層の直下には花崗岩のバイラン土を主体とする暗黄褐色砂層があり、堅緻に造成されており、浜床の基盤層と考えられる。出土遺物は少ないものの、土師器は古代末～中世前半頃にかけての時期と考えられる。

大田林遺跡は上島町弓削久司浦439番地に位置し、北緯34度17分26秒、東経133度13分39秒である。試掘トレンチを4カ所設定して、発掘を進め、いずれのトレンチにおいても灰黄褐色を呈し、コンクリートのように硬い浜床を検出した。出土遺物は少ないものの、土器・陶磁器は11世紀後半～12世紀に位置付けられる土器が大半を占める。

高浜八幡神社、大田林の調査では浜床層およびこれを挟む前後の層から炭化物や自然遺物が出土した。これらを試料として放射性炭素年代測定を行った。その結果、高浜八幡神社のデータは、浜床(21層)直上検出の貝が1121～1264 cal ADの数値を示した。大田林については2トレンチと4トレンチの浜床層で検出された炭化物の放射性炭素年代測定を実施し、その結果、2トレンチの炭化物が11世紀前半～12世紀中頃、4トレンチが13世紀代の数値を示した。出土した土器類の年代とも大きな齟齬はないと判断できる。

(3) 佐島の宮ノ浦遺跡では10世紀から11世紀を中心とする石組遺構や粘土で構築された槽状遺構が検出された。石組遺構は礫の表面が被熱しており、煮沸に使用された構造物と想定される。また槽状遺構は海水溜めの機能を想定しうる。遺物の中には漁網水や貝類や魚

骨類も多く出土し、海産物の加工が行われていたこともわかった。また出土した土器のなかには畿内系黒色土器、土師器が多く含まれており、荘園成立前夜の島と畿内との関係について議論できるようになった。

(4)新見市高瀬地区、上島町上弓削地区のいずれにおいても生産施設の存在を確認することができた。本研究が『東寺百合文書』に記述された鉄生産、塩生産を考古学的に初めて明らかにしたのである。高瀬地区においては踏査を継続することによってさらに製鉄遺跡が発見されることは間違いない。また上弓削地区にも、山内氏の研究にしたがえば、高浜八幡神社、大田林以外の浜床地名があり、試掘の実施が望まれる。今後、継続的な調査を行うことによって、それぞれの地域における鉄生産、塩生産をものがたる基礎資料の蓄積が期待できる。

<引用文献>

網野善彦 1995 「荘園に生きる人々」『中世のムラ - 景観は語りかける - 』東京大学出版会、
pp . 19 ~ 32

山内 譲 1985 『弓削島荘の歴史』弓削町

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木康之	4. 巻 10
2. 論文標題 草戸千軒遺跡出土資料にみる鎌倉時代の『会所』と『唐物』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 家具道具室内史	6. 最初と最後の頁 22-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木康之	4. 巻 50
2. 論文標題 備後南部地域を中心とする広島県域の中世土器に関する覚書	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 芸備	6. 最初と最後の頁 126-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木康之	4. 巻 300
2. 論文標題 『草戸千軒』をめぐる人々 - 常福寺の住持・沙門頼秀とは -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 芸備地方史研究	6. 最初と最後の頁 85 - 89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 榎林啓介
2. 発表標題 上島町宮ノ浦遺跡と弓削嶋荘の塩生産をめぐって
3. 学会等名 東寺領新見荘の鉄・弓削嶋荘の鉄 - 研究成果中間発表報告会 -
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村上恭通
2. 発表標題 新見市神郷油野所在三谷床畑遺跡と新見荘の鉄
3. 学会等名 東寺領新見荘の鉄・弓削嶋荘の鉄 - 研究成果中間発表報告会 -
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木康之
2. 発表標題 土器・陶磁器に見る荘園の物流と暮らし
3. 学会等名 東寺領新見荘の鉄・弓削嶋荘の鉄 - 研究成果中間発表報告会 -
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 槇林啓介・村上恭通
2. 発表標題 上島町宮ノ浦遺跡での製塩活動
3. 学会等名 海洋考古学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村上恭通
2. 発表標題 古墳時代の製塩活動と環境変化
3. 学会等名 第20回アジア歴史講演会『古代製塩と自然環境』
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 榎林啓介
2. 発表標題 瀬戸内海沿岸地域の環境変化と人々の対応
3. 学会等名 瀬戸内研究フォーラム in 愛媛
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 榎林啓介
2. 発表標題 瀬戸内海沿岸地域の考古学 - 愛媛県宮ノ浦遺跡とクロスナ層をめぐって -
3. 学会等名 考古学研究会岡山例会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 榎林啓介
2. 発表標題 第6次発掘調査の概要
3. 学会等名 宮ノ浦遺跡第6次発掘調査報告会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木康之
2. 発表標題 河口の港が果たした役割 日本海と瀬戸内海
3. 学会等名 第112回歴博フォーラム「中世益田の世界」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榎林啓介
2. 発表標題 上島町宮ノ浦製塩遺跡と 瀬戸内の海人文化
3. 学会等名 愛媛県立歴史文化博物館2019年度テーマ展「瀬戸内の海人たち」 特別講演
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榎林啓介
2. 発表標題 四国地方 宮ノ浦遺跡
3. 学会等名 シンポジウム「日本列島における製塩技術史の解明 」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 村上恭通	4. 発行年 2019年
2. 出版社 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター	5. 総ページ数 3
3. 書名 東寺領荘園（新見荘・弓削荘）の考古学的基礎研究-2018年度の研究成果-	

1. 著者名 村上恭通	4. 発行年 2019年
2. 出版社 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター	5. 総ページ数 13
3. 書名 新見と鉄の絆 - 2018年度フィールド活動報告 -	

1. 著者名 品川愛、村上恭通ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛県越智郡上島町教育委員会	5. 総ページ数 137
3. 書名 宮ノ浦遺跡 - 第8次発掘調査報告 -	

1. 著者名 村上恭通、榎林啓介、鈴木康之	4. 発行年 2017年
2. 出版社 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター	5. 総ページ数 14
3. 書名 東寺領新見荘の鉄・弓削荘の塩 - 研究成果中間発表会 -	

1. 著者名 有馬啓介、持永壮志朗ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛県越智郡上島町教育委員会	5. 総ページ数 205
3. 書名 宮ノ浦遺跡 - 第6次・第7次発掘調査報告 -	

1. 著者名 鈴木康之	4. 発行年 2016年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 28
3. 書名 港湾集落『備後草津』の特質 - 草戸千軒町遺跡の発掘調査から -	

1. 著者名 村上恭通、鈴木康之、榎林啓介、有馬啓介、青木聡	4. 発行年 2020年
2. 出版社 愛媛大学アジア産業考古学研究センター	5. 総ページ数 44
3. 書名 東寺領荘園（新見荘・弓削島荘）の考古学的基礎研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター http://www.ccr.ehime-u.ac.jp/aic/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 康之 (Suzuki Yasuyuki) (10733272)	県立広島大学・人間文化学部・教授 (25406)	
研究分担者	榎林 啓介 (Makibayashi Keisuke) (50403621)	愛媛大学・アジア古代産業考古学研究センター・准教授 (16301)	